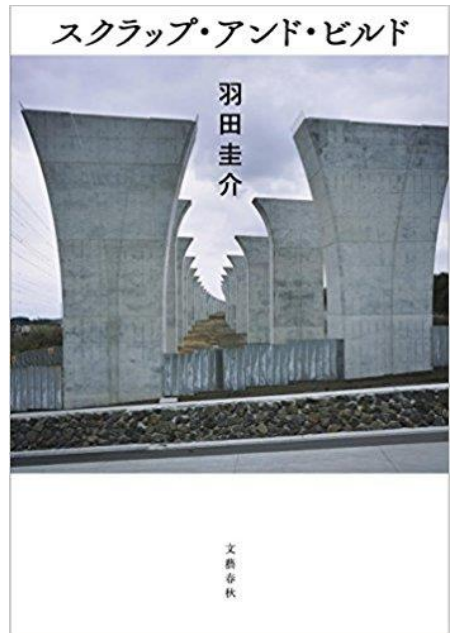


成立学園中学・高等学校

「国語学力調査」

『スクラップ・アンド・ビルド』

(羽田 圭介)



次の文章は、羽田圭介の小説『スクラップ・アンド・ビルド』の一節である。

主人公の健斗・28歳は資格試験の勉強を自宅でしながら転職活動中。企業の中途採用に何度も落ちるも、明るい未来を描いている。自身の体調管理にも厳しく、筋トレやジョギングを欠かさない。

その健斗と同居しているのは健斗の母親と87歳になる要介護の祖父。年齢から見たらほとんど健康体といってもいい祖父なのに、口癖は「もう死んだほうがよか」。実際に服毒自殺を試みたこともある。健斗も健斗の母もそんな祖父にうんざりしている。

健斗は祖父に嫌気がさしつつも、介護をするようになるのだが、本当の目的は別のところにある。祖父の社会復帰を「手厚く介護すること」により邪魔し、祖父を弱らせ、「自然な尊厳死」を迎えるようにたくらむ。以下はそれに続く部分である。

これを読んで、後の問いに答えよ。

翌日土曜、夜中から午前中まで降り続いた雨で桜の花が散った中、突然訪れた寒波により気温は前日比で六度下がった。

「じいちゃんはまだ死んだらよか。早く迎えが来てくれることを祈っとる」

暗い部屋で綿素材の服を何枚も着こんだ祖父が手を合わせ言う。勉強の気分転換に寄った健斗は言葉を返すかわりに、過剰な介護で応える。整理途中だったらしき衣類を整理し、水滴やプラスチックのコップに入った水を捨てたり入れ替えたりし、枕元に出し過ぎて整理がつかなくなっている薬類の未開封ぶんをそれぞれ所定のポーチにしまう。

気候的にちよつと調子が良くなり死にたいとはあまり言わなくなった祖父を前にここ数日、健斗は欲求の手助けに励んでいた自分がまるで悪いことでもしていたかのような心地にさいなまれていた。しかし辛い気候が訪れると同時に、祖父は切なる願いをようやく思い出した。母が友人たちと遊びに出かけたこともあり、健斗は過剰な介護に今朝から再び全力でとりくんではいる。「やおくて甘い」食べ物の代表格で祖父の好きなトーストを少し焦がしてしまつたが、マーガリンとジャムをたっぷり塗り昼食として出した。焦げとマーガリンは発ガン性が近年問題視されているが、死に至る病の中ではガンが最も楽だと聞いている。祖父の部屋のカーテンを全開にすることで、日光による皮膚ガン発症をうながしめた。使い終えた皿やコップも健斗がさげることによって被介護者が運動する機会を奪つた。服薬自殺未遂以来ずっと中身をラムネに変えていた「睡眠導入剤」と記された小瓶の中に、大量にストックのある本物の睡眠導入剤を足し入れた。

「自分のことがなあんもできんことなつたら終わりやね。でも、なかなか迎えに来てくれん」

丸い背骨の先に頭を掲げているような祖父の声は通りが悪く、誰に向けられている言葉なのかも曖昧だ。服を整理しながら、難儀なも

15 のだと健斗は思う。エンメイ治療が発達した今の世では、したいことなどなにもできないがただ生き長らえている状態の中で、どのように死を迎えるべきかを自分で考えなければならなくなってしまった。ほとんどの人は昼も夜もない地獄の終わりをただじつと待つしかない。それは長寿の現代人にもたらされた受難なのか。目の前にいるこの小さな祖父一人にそれを担かわせるのはあまりに酷こくではないか。「足も腕もじえんぶ痛くてねえ」

20 身体のあちこちを自分で揉んだり叩いたりしている祖父に対し以前のようにマッサージでもしてやりたい衝動に駆かられた健斗だったが、我慢する。筋肉を凝り固まらせ、苦痛を大きくし、死にたい欲求を一気に高めて目的を達成させてあげなければ、同じことの繰り返しだ。
「便秘ももう一週間よ。じえんじえん出んで」

25 「俺みたいに、毎日一生懸命腿上げの運動とかしてればウンコなんか毎日朝と晩出るけどね。じいちゃんはどうそれができないものね」「農業で腰も曲がってしまったせいで、もう運動もできんけん。このままじゃ、摘便するしかなかね」

健斗は摘便がどういうものか知っている。被介護者のアヌスに介護者が指をつっこみ、宿便を取り除く行為だ。「する」のは誰か。母と健斗の二択の場合、同性である健斗になるだろう。祖父の身体が摘便が必要なほどポンコツになる前に、早く尊厳死願望の片をつけなければならぬと健斗はあらためて思った。

30 それにしても、日課となつているこの時間は、ストレスと同等以上の安心感を健斗にもたらす。中途採用面接にも受からず金もない身であつても、尊い価値があると感じられるのだ。ちゃんと夜に眠れるし、自分で歩けるどころか走れるし、重い物も運べれば身体のちよつとした不具合ならすぐ治る。肌も綺麗だ。祖父のそばにいただけで、それらに（ a ） 的になれた。

友人と出かけた歌番組の一般観覧から午後六時には帰ってきた母も交え、三人で夕食を食べた。外でストレスを発散してきた母は食卓についてしばらくは機嫌よさそうにしていたものの、祖父の皿から豚の角煮とつけあわせのほうれん草がいつに減っていないのに気づくと、一瞬で顔つきが陰しくなった。

35 「それ豚よ。角煮だから柔らかいよ」
「肉なら食わんでよか」

息を吸い大きく舌打ちをした母をいさめるように、健斗も祖父に角煮をすすめる。角煮もほうれん草も、祖父にあわせ歯ごたえがなくなるほど柔らかく作られてある。

「角煮だから、豆腐みたいに柔らかいよ。食べてみな」

言ってしまったからこれではたんぱく質を補給させ自立をうながすことになる。健斗は気づいた。祖父は一切れを四分の一に切ったものを箸で口に運び入れると「やおくておいし」とだけ言った。

「そのほうれん草もちゃんと食べなきゃだめよ」

怒りが露あわになつている声で母に言われほうれん草を口にした祖父だったが、数度咀嚼そしゃくすると白っぽくなった固まりを皿の上にぺっと吐き出した。

「かたか」

45 「どうもろこしは食べるくせに！」

母の剣幕に小さくなってみせる祖父だったが、さすがの健斗も同情しかねた。入れ歯でもじゅうぶん磨り潰せる柔らかさだ。つまり（b）的にしか咀嚼しなかったわけで、そこには肉とほうれん草は硬いという決めつけがある。ふと健斗は、人生経験や老人の知恵などくだらないと思った。昨日硬かった肉やほうれん草が今日も硬いかどうかなんて、挑戦してみなければわからないではないか。その後デザートとして出された、角煮やほうれん草よりはるかに硬いクッキーと梨を祖父はそれぞれ二つ三つとたいらげた。

50 ここ連日の暖かい日に祖父の見せてきた態度は、アシストする健斗のモチベーションをも低下させていた。自室へ戻った健斗は、祖父の尊厳死願望を確認すべく、眠くもないのにベッドへ仰向けになる。蛍光灯に照らされた白い天井や壁しか見えない。祖父になりきるの

は十五分が限界だった。病院やデイサービス施設以外に外出もできず、この閉塞感Aが生きている間中ずっと続くのか。こんなに辛いのなら、祖父が早く死にたがっていることに間違いはないと健斗は確認できた。そして、こうして定期的に祖父になる行為は必要だとニンシBキCした。

60 フンシヨク決算で業績が悪化して久しい医療機器メーカーの子会社に、健斗は営業職として中途採用された。資格勉強していた行政書士とはまったく異なる業種だが、三流大学出身者では決して就職できないような企業に就職できたのも、ここ数か月の（c）的生活で培った様々な能力のおかげなのはあきらまかだった。勤務地は茨城県の筑波研究学園都市で、社宅はそこから約一〇キロ離れたところにある阿見町という、霞ヶ浦近くの鉄骨造アパートだ。内定をもらい一カ月弱の間に引越すためすでに二度訪れており、来週の初出勤に向け、三二万円の中古車も現地カーディーラーで調達済みだった。

「寂しくなるねえ」

65 クーラー稼動中の車で坂道を下っている最中、後部座席に座る祖父が助手席の健斗へつぶやく。母と叔父は、祖父を長崎県の大村にある特別養護老人ホームへ入所させる予約をした。田舎の（d）的低倍率の施設だったが、それでも二、三年の順番待ちだ。

「茨城なんか近いんだし、余裕ができたらまた戻ってくるよ」

「じいちゃんのこととは気にせんで、頑張れ」

健斗は不意をつかれた。てつきり、目前の寂しさからくる言葉を口にすると思った。カラ元気なのか、それとも言葉のとおり、祖父の進退を「気にせんで」生きてゆけと思っっているのか。

「当面の間は茨城に赴任だけど、東京の本社なりに戻ってくる可能性はあるから」

70 その時、祖父もまだ特養の順番待ちをしながら生きているかもしれない。むしろ、死んでいる場合を、想像できなかった。特養に入れば介護のプロたちによる完全なる管理下で、祖父は苦しみながらもっと長生きさせられる地獄を味わうだろう。

「お母さんがガミガミ怒るだろうから、じいちゃんの味方をするためにも盆、暮れ、正月には必ず帰るから。俺がやって来るのを待つてつよ」

「電車ですぐなんだし、週末暇だったらいつでも来なさいよ」

75 「いや、健斗には健斗の時間のあるけん、来んでよかよ。じいちゃん、自分のことは自分でやる」

駅ロータリーにつき、車のそばで重い荷物をすべて背負い立った健斗は、運転席の母と後部座席の祖父へ顔を見せるよう少し屈む^{かが}。

「じゃあ、行って参ります」

「はい、氣をつけて」

80

パワースライドドアが閉まりきる前に車は動きだし、サイドウィンドウやリアウィンドウ越しに、祖父と健斗の手の振りあいはい互いの顔が見えなくなるまで続いた。

京王相模原線の新宿行きに乗った健斗は、最後尾車両の運転室前の角に重い荷物を置き、窓の外を眺める。反対側には小山の斜面や緑しか見えないが、健斗のしている側には開けた視界に古びたマンションや一軒家、それに空の遠くにまるで巨大な亀頭のような白い積乱雲が見える。澄みきった青空の中で、近づいてきているのか遠のいているのかもわからないそのシルエットは、異様な存在感を呈していた。

85

約一年ぶりのサラリーマン生活を、健斗は不安に思っている。フンシヨク決算をした会社の子会社の離職率は高いらしかった。それに、

90

三〇年近くずっと東京の南西で育った身には、知人が一人もない新天地でうまくやっていけるのかもわからない。斜め向かいの席では、一目で素材の良さのわかる麻ジャケットを着た男と立体裁断のワンピースを着た女の健斗と同年輩カップルが、静かに談笑している。高価そうな服を着た、顔形の整ったカップルはいかにも高収入のヤングエグゼクティブふうで、なにより、自信に満ち溢れた感じが曇りのない笑顔に表れていた。自分との差に健斗が目を逸らした先にも、シートに並んで座る同年輩夫婦に男児一人の三人家族が映る。ビール腹が板についた夫はどっしりしており、とうに諦めを知り、それと引き替えに人のために生きることを悟っている雰囲気をもじらしている。彼ら彼女らと比べ自分は、三〇前にしてようやく再就職できただけの、ひどく不安定な存在だと健斗は感じた。支えを失い、よめいてつまづき転んでしまいそうな心地だった。ふと、優先席の（X）に目が向いていて、（Y）を探していたことに健斗は気づく。自分より弱い肉体が、そばにない。

95

やがて電車は多摩川へさしかかり、座っていた乗客の何人かが立ち上がり、健斗のように窓の外へ目を向けた。広い川幅に水流が分散しているためか川面の所々に、砂利の中州が見える。そして川のはるか上空に、虫でも鳥でもないなにかが飛んでいた。プロペラ機だ。近くの調布飛行場から出たセスナだろう。戦後の管理者が在日米軍から日本政府、東京都へと変遷する中で調布飛行場はその存在意義を薄れさせ、個人所有のセスナばかりが離着陸する道楽用みたいな空港になった。しかし電車の中からたまにセスナを目で追いかけるぶんには楽しめ、それは健斗がまだ一人で電車に乗ることもできなかった頃から今に至るまで変わらない。

積乱雲は、近づいてきていた。数時間後の夕方までには多摩グラントハイツの上空を覆い、暗い部屋で気の塞いだ祖父が死にたいとつぶやきだすだろう。自分がいなくなった家で、母がそれに耐えられるかどうかも健斗は心配する。

あらゆることが不安だ。

しかし少なくとも今の自分には、昼も夜もない地獄の中で闘い続ける力が備わっている。先人が、それを教えてくれた。どちらにふりさかることもできない辛い状況の中でも、闘い続けるしかないのだ。

プロペラが視認できるほどまでに近づいてきていたセスナは、いつのまにか雲に隠れ、見えなくなっていた。

(スクラップ・アンド・ビルド「羽田圭介」)

問1 二重傍線部ア〜オのカタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。(2点×5)

問2 空欄(a)〜(d)に入る言葉を選択肢からそれぞれ一つずつ選びなさい。(2点×4)

ア、生産 イ、形式 ウ、比較 エ、自覚

問3 傍線部A「蛍光灯に照らされた白い天井や壁しか見えない」「閉塞感」とあるが、このような状態を筆者は何と表現しているか。傍線部より前に1か所。傍線部より後に1か所。2か所とも同じ8文字の表現である。抜き出しなさい。(4点)

問4 2つある空欄(X)(Y)にはほぼ同じ意味の漢字2字の言葉が入る。それぞれ考えて記入しなさい。(2点×2)

問5 傍線部B「じいちゃんのことには気にせんで、頑張り」とあるが、この言葉の真意を想像して書きなさい。(9点)

問6 この作者がこの作品を通して読者に伝えたい、または考えさせたいテーマ、狙いは何か。具体的に答えなさい。(15点)